2015/11/11（last modified 2015/12/14）
Lanchon Linguistics 發表資料
笠間裕一郎（東京外国語大学大学院博士後期課程）

日本語学会 2015 年度秋季大会報告

笠間裕一郎（東京外国語大学大学院博士後期課程）

日時

2015 年 10 月 31 日（土）　13 時 00 分－18 時 10 分（口頭発表，会長就任講演，懇親会）
2015 年 11 月 1 日（日）　10 時 00 分－16 時 00 分（ブース発表，大会式典，シンポジウム，ワークショップ）

場所

10 月 31 日（土）　山口大学　吉田キャンパス
11 月 1 日（日）　山口県教育会館、山口県立山口図書館

全体スケジュール

10 月 31 日（土）	13 時 00 分－17 時 10 分	口頭発表
	17 時 30 分－18 時 10 分	会長就任講演
	19 時 00 分－21 時 00 分	懇親会
11 月 1 日（日）	10 時 00 分－11 時 00 分	ブース発表
	12 時 30 分－12 時 50 分	大会式典
	13 時 00 分－16 時 00 分	シンポジウム
	13 時 00 分－16 時 00 分	ワークショップ

口頭発表

A 会場

大阪方言の素材待遇形式ヤル―「親愛」の意味するもの―
酒井雅史（大阪大学学生），野間純平
連用形命令の取り入れの地域差―大阪方言と広島方言の対照から―
森勇太（関西大学）
南琉球八重山黒島方言における二重有声摩擦音とその揺れ
原田走一郎（与那国町教育委員会）
南琉球八重山地方石垣宮良方言の指示代名詞
荻野千砂子（福岡教育大学）
先行研究の等語線の引き方
荻野綱男（日本大学）

B 会場

談話におけるフィラー待遇の研究―「ま(ー)」と「なんか」について―
魏春娥（山口大学学生）
言語行動からみる新語形成プロセスについて―熟議を利用して―
黒﨑貴史（山口大学学生）
衆議院における「させていただく」の使用実態とその用法の変化について―『国会会議録検索システム』を利用して―
李ヒョン珍（首都大学東京学生）
現代日本語の依頼表現における「いただく」使用の広がりとその要因
野呂健一（高田短期大学）
日本語の「動作主が不特定の人為的事態」の表現―ロシア語の不定人称文との比較をかねて―
副島健作（東北大学）

C 会場

ア系文脈指示詞と聞き手の存在認知に関する研究
陳海涛（九州大学学生）
「食べが悪い」は誤用か？―位相語の観点からみた連用形名詞―

DUONG THI　HOA（大阪大学学生）
日本語における指示詞の省略可能性に関する一考察

陳エン如（広島大学）
現代日本語における二字漢語の字順逆転による意味上の相違について―現代中国語の二字漢語と比較して―

馬雲（首都大学東京学生）
ら抜き言葉の変種〈―れれる・―ｅれる〉形式にみられる受身の用法について―「振れれるのもいやだし・いじめれれる子供・女性にことわれ続け」―

浅川哲也（首都大学東京）

D 会場

美に関する語彙の国語史的研究―夏目漱石における「ウツクシ」と「キレイ」を中心に―

蘇文キン（新潟大学学生）
橋爪貫一『世界商売往来』依拠資料試探

丸山健一郎（同志社大学学生）
十世紀日本語京都方言動詞屈折形態論

笠間裕一郎（東京外国語大学学生）
古代日本語の動詞語幹交替より垣間見ゆる，九州方言が「上一段動詞」を r 語幹動詞たらしむる動機

黒木邦彦（神戸松蔭女子学院大学）
天草版『平家物語』の注記記号が持つ意味

川口敦子（三重大学）

会長就任講演

日本語学会会長　仁田義雄

懇親会

ブース発表

E 会場

雲州本『延喜式』巻 37「典薬寮」所載「薬物」の和名

辜玉茹（台湾・中国医薬大学）
人情本のコーパス化

藤本灯（国立国語研究所），北﨑勇帆，市村太郎，岡部嘉幸，高田智和
山田孝雄の未刊稿『日本文体の変遷』

田中草大（日本学術振興会），藤本灯，北﨑勇帆

F 会場

やさしい日本語ニュースの高頻度語彙―意味分野を中心に―

近藤めぐみ（タイ・チュラーロンコーン大学）
パラオ語における日本語借用語の変化

今村圭介（東京医科歯科大学）
ツイッター投稿データにもとづく「気づかない方言」の分布解明

峪口有香子（徳島大学学生），桐村喬，岸江信介

大会式典

シンポジウム

「日本語学」をどのように教えるか
パネリスト

小田勝（岐阜聖徳学園大学），日高水穂（関西大学），山内博之（実践女子大学）

司会　福嶋健伸（実践女子大学）

ワークショップ

地方議会会議録から見える日本語のバリエーション
二階堂整（福岡女学院大学），松田謙次郎（神戸松蔭女子学院大学），高丸圭一（宇都宮共

2015/11/11（last modified 2015/12/14）
Lanchon Linguistics 發表資料
笠間裕一郎（東京外国語大学大学院博士後期課程）

和大学），山際彰（関西大学学生），佐藤亜実（東北大学学生）

發表報告

1.十世紀日本語京都方言動詞屈折形態論

笠間裕一郎（東京外国語大学大学院博士後期課程）

1.1 發表の概要

十世紀日本語京都方言動詞屈折形態論に就て、「アクセント」含め一般言語學的觀點より各形態素の分節音形と其等の爲す體系を考へる。主張は次の通り。

第一 動詞語幹（根）は(Ⅰ)頻度(Ⅱ)語幹末分節音(Ⅲ)語幹末分節音削除の有無の三點より八分。

第二 屈折接尾辭は屈折素性(Ⅰ)眞理値(Ⅱ)實現性(Ⅲ)現存性(Ⅳ)法性(Ⅴ)確定性(Ⅵ)節構造の6より六十四分される。範例は中和狀況・相補分布より三次元の體系をなす。

第三 從來の學校文法で助動詞とされる「ム」「ラム」「シ・シカ」「ズ」「ジ」「マシ」、助詞とされる「(未然）バ」「バヤ」「ナム」「(打消）デ」「(禁止）ナ」「シカ」「テ（動詞語幹に音便を惹起こす場合)」は屈折接尾辭である。

猶、本發表は共時論である。

第一を表形式で纏めると次の通り。

表１　動詞語幹（根）					
		高頻度		低頻度	
		母音語幹動詞	非母音語幹動詞	母音語幹動詞	非母音語幹動詞
末尾削除	有	「下二段」motome-	「サ變」se-,s-	「上二段」kopi-	「カ變」ko-,k-
	無	「上一段」mi-	「四段・ラ變」kak-・ar-	「下一段」kwe-	「ナ變」sin-

第二・第三を表形式で纏めると次の通り。

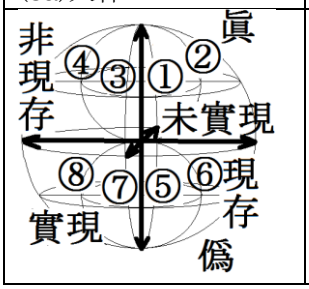
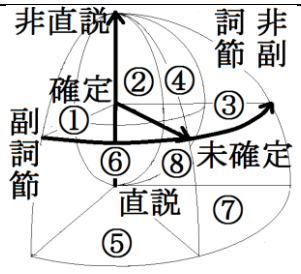
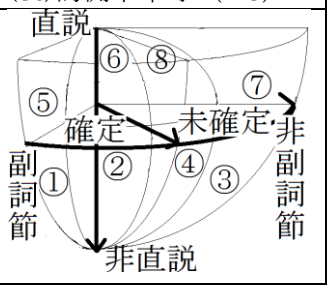
表２　屈折接尾辭範例詳細（表形式）												
(Ⅰ)	眞				僞					(Ⅴ)	(Ⅳ)	(Ⅵ)
(Ⅱ)	未實現	實現	實現	未實現	未實現	實現	實現	未實現				
(Ⅲ)	非現存	現存	非現存	現存	非現存	現存	非現存	現存				
テ形	***te/ite***				***ade***				⑥	確定	副詞	直説法
連用形	I				***azu***	i	***azu***	i	⑤	未確定	副詞	
終止形	amu	ur		***urra mu***	azi	***azu***		ama si	⑦	未確定	非副詞	
連體形		***uru***	isi			anu			⑧	確定	非副詞	
已然形	ame	ure	isika	***urra me***	amasi ka	ane		ama sika	②	確定	非副詞	非直説
未然	***aba***		[1]	***aba***	amasi kaba		amasikaba		①	未確	副詞	

[1] 予稿集には此處に iseba が存在したが、是は上代語特有の屈折接尾辭。

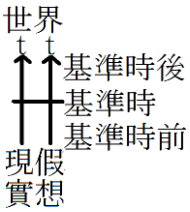
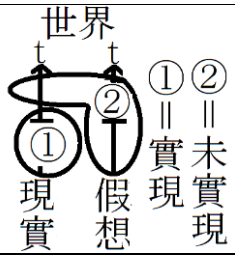
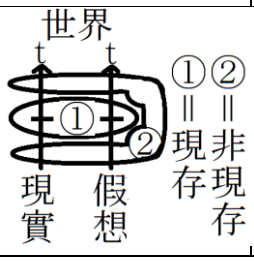
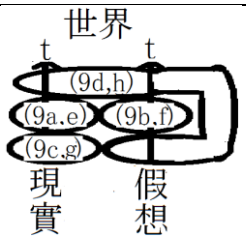
バ形									定		法
命令形	ana mu	e		ana mu	***urna***			③	未確定	非副詞	
希求形	isika			isika	abaja		abaja	④	確定	非副詞	
	9d	9a	9c	9b	9h	9e	9g	9f			
	助動詞ム他	活用語尾	助動詞キのｓ系他	助動詞ラム他	助動詞ジ他	助動詞ズ他		助動詞マシ他			

第二は本來表形式でなく、三次元の圖の形式に纏められる。大枠のみを以下示す。

表 3　屈折接尾辭範例

(8a)大枠	(8b)眞側上半球（1/8）	(8c)僞側下半球（1/8）
		

幾つかの術語に就て説明する。眞理値は語幹迄で表される命題に對する解釋の結果。事實に則して二つの値{眞，僞}何れかを取る。事實に反する場合{僞}、それ以外は{眞}。直説法は當該命題が論理記號を持たない事を表す。非直説法は當該命題が⇒や∴等の記號を持つ事を表す。確定性とは命題の眞理値が決定してゐるか否かを示す。實現性・現存性に就ては表 4 を參照。現實世界の基準時後と假想世界を併せた物が未實現。現實世界と假想世界の基準時以外を併せた物が非現存。

表 4　時間と世界の切り取り方	(1b)實現對未實現	(1c)現存對非現存	(1d)表 2 との對應關係
(1a)基本的概念圖 			

表層形を導く規則は次の通りとなる。

(2)形態音韻規則

a. 接尾辭左方切詰　urV]$_{\text{屈折接尾辭・語}}$→V/四段・ラ變活用動詞]$_{\text{語幹}}$__

b. 語幹末母音削除　V]「二段動詞」語基→Ø/__[u 始まりの屈折接尾辭・語及び他動性交替接尾辭

c. 接尾辭・語左端削除 1　V(…)]$_{\text{//ur(C)//始まり以外の接尾辭・語}}$→Ø(…)/V]「一段動詞」語根__

d. 接尾辭・語初頭母音削除　V(…)]$_{\text{非 u 始まりの接尾辭・語}}$→Ø(…)/V]$_{\text{語基}}$__

e. 接尾辭・語左端削除 2　CV(…)]$_{\text{Type1 接尾辭}}$→V(…)/C]$_{\text{語基}}$__

f. 有聲化規則　$_{\text{形態素}}$[$C_{2[\text{-voice}]}$(…)→$_{\text{形態素}}$[$C_{2[\text{+voice}]}$(…)/(…)$C_{1[\text{+voice}]}$]$_{\text{動詞語根}}$__　但し C_1＝g.m.n

g. イ音便規則　(…)C[-syllabic,+dosal]]「四段動詞」語根→i]「四段動詞」語根/__形態素[C(…)
h. ウ音便規則　(…)p]「四段動詞」語根→u]「四段動詞」語根/__形態素[C(…)
i. 撥音便規則　(…)r]「ラ變動詞」語根→(…)C1[+nasal,αlabial]/__形態素[C2[+voice, αlabial](…)　但し C2＝b,m,n
j. 音位轉換　ur(C…)]接尾辭・語→ru(C…)/V]「一段動詞」語根__
k. 末子音削除　ur(C…)→u(C…)/(…)__(…)]「用言」

1.2　發表に對する質疑

發表に對する質疑（筆者註：全て要約）は語幹の分類に關し、頻度を指標とする點は妥當か(3a)、同じく語幹の分類に關し、分節音を基準とする點の妥當性、特に四段動詞とナ變動詞は語幹末子音の點で、「一段」動詞、特に「上一段」動詞と「上二段」動詞は語幹の分節音數（質問者の言では「音節數」）の點で「相補分布」を爲すが、其を分類する點に就て(3b)、連體形を派生する規則に就て、特にその個數・複雜性(3c)、末子音削除を必要とする「終止形」その他の基底形と表層形を出力する規則に就て(3d)で何れも屋名池誠氏からの物であつた（猶、是等の質問は質疑應答時間の半分以上を用ゐて一度になされた。發表者はメモを取つてゐなかつたので、纏めに不適切な點があるかも知れない。以下の回答も同樣）。

その他應答の中では、質問者は通時的觀點を含めて「二段」動詞を「複語幹動詞」とし、（筆者註：恐らく接辭に據つて）二つの語幹が「オートマティック」に選擇されると考へる(3e)と言ふ質問者の主張が見られた。

是に對する發表者の解答は以下の通り。

(3a)頻度を指標とする點の科學的方法論上の妥當性は特に考へたことはない。但し、この樣に分類した場合、分類指標として他に妥當な物は考へられない。

(3b)發表者としては分節音を基準に分類をしてゐるわけではない。語幹末分節音の削除の有無と、出來上り語形を基に是等を別のカテゴリに屬するとしてゐる。

(3c)「連體形」を派生する規則は、より抽象的には所謂「活用形」全體に掛かる音節數一致制約に支配されてゐる（活用形間の音節數一致については佐々木冠(2005)を參照）。規則の形で書くとこの樣に複雜になる。猶、この制約は「已然形」（と質問者には傳はつてゐないが「テ形」）に有効である。

(3d)末子音削除は、より抽象的には、上に述べた制約とより弱い制約である音節末子音の禁止によつてゐる。規則の形ではこの樣に「複雜」になる。

(3e)本論は飽く迄出發點からして共時論である。

1.3　反省點

表 5　動詞語幹（根）

		母音語幹動詞		非母音語幹動詞	
末尾削除	有	「下二段」motome-	「上二段」kopi-	「サ變」se-,s-	「カ變」ko-,k-
	無	「上一段」mi-	「下一段」kwe-	「四段・ラ變」kak-・ ar-	「ナ變」sin-
頻度		高	低	高	低

(3a)に就ては、分類指標の第一として頻度を擧げるのでは無く、第一に語幹末分節音、第二に語幹末分節音の削除、第三に頻度とするべきであつた。「頻度は科學的方法論において他の決め手がないときに用ゐられるものである」とする質問者の言に反さず、分類の順序も妥當な物となる。改めて分類し直すと表 5 の通り。

(3b)は質問者側の「相補分布」に對する理解に問題があると思はれる。「相補分布」に基づく二つ以上の形式の集約は、各領域内で妥当な理由があるときに可能である。例へば標準日本語の「サ行」子音は[s]と[ɕ]で相補分布する。これは/i/が後續するとき/s/が/i/の持つ素性により口蓋化する物である。これに對して「四段」動詞と「ナ變」動詞の音節末子音の分布とその出力（「連體形」）(4a)及び「上一段」動詞と「上二段」動詞語幹の分節音數と出力（「連

體形」）(4b)は次の通り。

(4a) 「四段」動詞と「ナ變」動詞の音節末子音の分布とその出力（「連體形」）

	語幹（根）末子音	「連體形」出力		語幹（根）末子音	「連體形」出力
「四段」	k,s,t,p,m,r,g,d,b	(C)VCu	「ナ變」	n	CVnuru

(4b)「上一段」動詞と「上二段」動詞語幹の分節音數と出力（「連體形」）

	語幹（根）分節音數	「連體形」出力		語幹（根）分節音數	「連體形」出力
上一段動詞	2	CVru	上二段動詞	3 以上	(C)V(CV……)Curu

(4a)は語幹（根）末子音が異ることが出力を決定してゐるとは言ひがたい。末子音に何らかの素性において共通する物があればよいが、其はないと思はれる。猶、「ナ變」動詞は「語」の音調が高く始まるにも關らず、語中にアクセントがある場合、語末にアクセントが來る點でも特殊であるが、「連體形」はアクセントがないので、この點から「連體形」の出力を説明することも困難である。(4b)も、同一カテゴリとした場合、「上一段」動詞と「上二段」動詞の出力の相違を語幹（根）分節音數に據つて説明せざるを得ないが、其を理由に上の出力を説明するのは無理がある。猶、同一カテゴリとした場合、特殊である「上一段動詞」の方が、語幹（根）が少なく、無標な構造を持つことになる。この點からも、兩者を同一カテゴリとするには無理があらう。

(3c)は規則と形態素の數の關係に就て述べておくべきであつたらう。規則による處理の妥當性は、規則の數と形態素の數の和の多寡で決る。特定の形態素（例へば「連體形」接尾辭）に對して幾つ規則が掛かるかで決る物ではない。一見して複雑な規則が存在したとしても、他の解釋より規則の數と形態素の數の和が少なければ、それが最適な記述である。形態素（或は異形態）を増やして、（他の形態素を參照して）「オートマティック」に何れかが選擇されるとしても、その選擇自體を「オートメイション」化するには規則と言ふ名のアルゴリズムが必要である。其は（語彙的な）規則を増やしてゐるのに等しい（この點は(3e)にも當てはまる）。

(3d)は特に問題無かつたと思はれる。

(3e)は共時論が通時論に對し先行することを述べるべきであつた。客觀的な形の通時的變化（歴史）は、在る同じ形式の二つのある時點での狀態が判明して初めて分る。二つの時點での形式そのものの記述が先行して行はれなければ、形式間の同一性そのものが擔保されない。通時論を含めて行なふ共時態の記述は、一見雙方を「合理的」に説明するので、共時態のみを扱ふ記述より包括的で「合理的」であるが、先行して述べる（或は「證明」す）べき形式間の同一性を述べて（或は「證明」して）ゐないので、全て論點先取の虚僞に陥つてをり、「空に正しい」。

また、この様な記述は無限後退を惹起こす。具體的には、溯及形式の記述ならば、平安時代の記述には、奈良時代語の記述が必要で、その説明には日本祖語の記述が、日本祖語の記述には、日琉祖語が……となる。進行形式の説明ならば、平安時代語の記述には鎌倉時代語の記述が必要で、その説明には室町時代語の記述が、室町時代語の記述には江戸時代語の、江戸時代語の記述には近代語の、近代語の説明には現代語の、現代語の説明には次世代語の記述が必要となる。假に共時態や通時態なる物がフィクションであつたとしても、言語についての凡ゆる議論を可能たらしめるには必要な假定である。

1.4 その他質疑とは無關係な反省點

眞理値について、予稿集では「語幹迄で表される命題に對する解釋の結果。事實に則して二つの値{眞, 僞}何れかを取る。事實に反する場合{僞}、それ以外は{眞}」としたが、是は（間接疑問文以外の）疑問文の様に、眞僞判斷が出來ない場合問題となる。この様な例を含める

場合、次の様に定義するべきであらう。
「眞理値は二つの値{眞，僞}からなる。論理定數。語幹迄の記號列が命題の時、談話における應答（或は行爲）を導き得る論理式を形成する。語幹迄で表はされる事柄が、背景知識に則して異る場合{僞}、それ以外は{眞}。解釋の結果。語幹迄の記號列が命題でない時、談話における應答（或は行爲）を導き得る前提を形成する。語幹迄で表はされる事柄が、背景知識に則して異る前提を形成する場合{僞}、それ以外は{眞}。[2]」
「非直説法は當該命題が⇒や∴等の記號を持つ事を表す。」は「記號」ではなく（特に右側の）オペレーターとするのが妥當であらう[3]。「確定性とは命題の眞理値が決定してゐるか否かを示す。」も上記同様に「命題」を「記號列」と改めるべきである。
猶、傳統的に「已然形」とされる語形の屈折素性の内、（Ⅳ）の「非副詞」節形は「副詞」節形の誤り。

2.參考文獻

笠間裕一郎(2014)『上代語形態論に關する一考察』第 64 回西日本国語国文学会山口大会(2014/09/14　於梅光学園大学)
笠間裕一郎(2015)『上代・中古「用言」形態論小結』第 259 回筑紫日本語研究会(2015/03/30 於熊本大学)
佐々木冠(2005)「日本語動詞形態論における韻律的単一性」『日本言語学会第 130 回大会予稿集』

[2] この點は所謂上代語卽ち奈良時代日本語奈良方言でも同様と考へる。笠間裕一郎(2014)、同(2015)を訂正する。他の屈折素性も發表に從ひ訂正。
[3] この點は川村大先生のご教授による。